地震対策ため池防災工事（宮池）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

ぎょくだい遺跡

２０１７年３月

香川県教育委員会

序文

本書は、地震対策ため池防災工事（宮池）に伴い発掘調査を実施した、香川県三豊市豊中町比地大に所在するぎょくだい遺跡の報告を収録しています。

ぎょくだい遺跡の周辺は、かつて「極台」と呼ばれており、寺院とかかわりのある場所とされてきました。

今回の調査で、寺院の存在を示すような遺構は見つかりませんでしたが、遺跡に隣接するため池成立以前の周辺の地形状況が判明したこと、中世の遺構・遺物が出土し、中世の集落が近隣に展開する可能性が想定できることが成果として挙げられます。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用され、埋蔵文化財への関心が深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまで、関係機関並びに地元関係者各位には、多大なご援助とご協力をいただきました。深く感謝申し上げるとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成 29 年３月

香川県埋蔵文化財センター

所長　増田　宏

例　　言

1　本報告書は、地震対策ため池防災工事（宮池）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、香川県三豊市豊中町比地大に所在するぎょくだい遺跡の報告を収録した。

2　発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3　発掘調査は、平成 28 年 11 月 1 日から平成 29 年 2 月 28 日まで実施し、香川県埋蔵文化財センター技師　竹内裕貴が担当した。
　なお、本報告書には、すべての発掘調査区の報告を掲載している。

4　調査・報告書の作成にあたって、下記の関係諸機関等のご協力を得た。
記して感謝申し上げたい。
　香川県西讃土地改良事務所、株式会社大和建設工業、宮池水利組合、宮池自治会

5　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施し、編集は竹内が行った。

6　本報告書で用いる座標系は国土座標（世界測地系）第Ⅳ系である。方位の北は国土座標系Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は次の略号により表示する。
SP　柱穴・小穴　　SR　自然流路

8　遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高（単位m）である。

9　遺構断面図中の注記の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

10　土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　調査体制・整理体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第２章　立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第３章　発掘調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　第２節　層位・・8
　第３節　調査区１の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　第４節　調査区２の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第４章　総括・・・16

挿図・表目次

第１図　調査地位置図・・・・・・・・・・・・・1
第２図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第３図　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・8
第４図　調査区全体平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第５図　堤体断面模式図・・・・・・・・・・・・9
第６図　調査区１　壁面土層・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第７図　SP2003 平・断面図・・・・・・・・・・・12
第８図　SR1005　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第９図　SR2006 縦断面図・・・・・・・・・・・・13
第 10 図 SR2006 上層　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・14
第 11 図 SR2006 下層出土遺物・・・・・・・・・・14
第１表　遺跡名称・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第２表　遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・18

写真目次

図版１　調査地遠景（七宝山から、写真中央が宮池）　調査地遠景（宮池堤体上から）
図版２　調査区１　完掘状況（南東から）　調査区１　堤体断面
図版３　調査区２　SR1005　遺物出土状況　調査区２　SR1005 完掘状況
図版４　調査区２　遺構検出状況１　調査区２　遺構検出状況
図版５　調査区２　SP2003　断面　調査区２　SR2006 断面
図版６　SR1005　出土遺物　SR2006 出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

香川県は、全国的にみても多数のため池が農業用水を中心に、今も昔も貴重な水源となっている。県内の大規模なため池を対象に、耐震点検調査を実施し、補強が必要なため池の耐震工事を行うという目的から、地震対策ため池防災工事（宮池）が計画された。

それに伴い、香川県三豊市豊中町比地大に所在する宮池に隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地である、ぎょくだい遺跡の範囲に工事が及ぶことから、事業範囲の中の 226 ㎡の範囲について、文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断された。

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成 28 年 11 月 16 日から平成 28 年 12 月 1 日まで行った。また、ぎょくだい遺跡の範囲以外の隣接地でも、堤体工事のための基盤改良によって掘削行為がなされるということから、香川県西讃土地改良事務所、株式会社大和建設工業の協力を得て、施工時に工事立会を行ったが、遺構・遺物の出土は見られなかった。そのため、本来のぎょくだい遺跡の範囲のみ発掘調査を行った。

整理作業は、ぎょくだい遺跡の発掘調査の完了後の平成 28 年 12 月 2 日に開始し、平成 29 年２月まで行った。

第１図　調査地位置図

第３節　調査体制・整理体制

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

平成28年度発掘調査・整理作業体制一覧

香川県教育委員会事務局　生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	小柳　和代	総括	所長	増田　宏
	副課長	片桐　孝浩		次長	森　格也
総務・生涯学習推進グループ			総務課	次長	森　格也（兼）
	副主幹	松下　由希子		副主幹	斎藤　政好
	主事	和木　麻佳		主任	寺岡　仁美
				主任	丸尾　麻知子
文化財グループ				主任	岩崎　昌平
	課長補佐	片桐　孝浩（兼）		主任	西谷　敬司
	主任文化財専門員	山下平重			
	主任文化財専門員	乗松真也	調査課	調査課長	森　格也（兼）
				技師	竹内　裕貴
				嘱託	今井　由佳

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

ぎょくだい遺跡は、香川県三豊市豊中町比地大に位置する。三豊市は香川県西部に位置し、面積22,271㎢、人口65,713人を数える市であり、平成17年に当時の７町が合併し誕生した。

市内は南北に長く、市の北から西側には荘内半島から七宝山、東は黒戸山から南に向かい四国山地まで続く山地がそれぞれ展開し、それらに囲まれた三豊平野が現在の三豊市の中心となっている。

三豊市内の平野の様子についてみてみると、高瀬町・豊中町の境界付近から北は高瀬川、南は財田川がそれぞれ瀬戸内海へと流れる。

ぎょくだい遺跡は、三豊市豊中町に位置する。豊中町は、下流において財田川へと流入する竿川によって形成された沖積平野を中心とし、平野の東は七宝山、西は鳥越山、陣山、眉山がそびえ、平野と山地の間には緩傾斜の丘陵地帯が展開している。平野から山地に至るまでの丘陵地帯では、現在でも畑作が盛んに行われており、ぎょくだい遺跡もその丘陵部に位置する。

ここで、豊中町内における遺跡の分布をみてみると遺跡のほとんどが、東西の山地へと至る丘陵上に位置することがわかる。平野には、古墳や中世の城・居館がわずかにみられる。

平野の中央部を流れる竿川は、東西それぞれの山地から流下を受けるためしばしば氾濫し、現在の地割をみても、特に竿川左岸については地割の乱れや不整合が目に付く。しかし、三豊平野の条里型地割についてみると、現在の比地大駅周辺の平野部には断片的であるが不整形な条里型地割が確認できる（金田 1988）。

ぎょくだい遺跡の位置する丘陵部については、細かにめぐっていた谷筋が次第に埋没し、それによって生じた緩斜面地等を利用し、多くのため池が築かれる。丘陵部では、弥生時代から中世までの遺跡が見つかっている。

第２節　歴史的環境

豊中町内の遺跡については、調査件数の少なさからも、実態が判明しているものは少ない。地名や伝承、遺物が採集されたことにより遺跡の場所が判明しているものについても、かつての姿をとどめていないものが多く、実態が不明なものも少なくない。

ここでは、時系列に沿って、豊中町域を中心とした三豊市の遺跡の状況を概観する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡については、豊中町においては未だ確認されていない。三豊市内については高瀬町の利生寺２号墳・大門遺跡、三野町の宗吉瓦窯跡からナイフ形石器が出土しており、観音寺市では一の谷遺跡群で遺物の出土が確認できる。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、七宝山を挟んで西側の仁尾・詫間町域の丘陵部や島しょ部に遺跡が集中し、県内でも有数の遺跡の密度を誇る。一方三豊平野に目を向けると、縄文時代の遺跡の数は少ない。

延命遺跡では、縄文時代後期・晩期の遺物が見つかっているが、明確に遺構としてとらえられるもの

は少ない。

弥生時代

弥生時代には三豊市内全域で遺跡数が増加する。平野部を囲むようにある山地に向かう丘陵上に、遺跡の多くは立地している。

平野東部では、延命遺跡、天神遺跡などの遺跡があげられる。延命遺跡は、四国自動車横断道建設に伴い発掘調査が実施され、弥生時代前期と終末期の遺構・遺物が確認されている。

また、七宝山東麓においては、比地大の政本遺跡、岡本の不動の滝遺跡など、丘陵部において遺跡が確認される。不動の滝遺跡は、不動の滝より流下する滝下川の流域に存在する弥生時代の集落である。近年発掘調査が実施され、弥生時代中期の集落であることが確認された（三豊市教育委員会 2014）。

政本遺跡では、石鏃が採集されている。

古墳時代

三豊平野北部での古墳の築造は全体的にみると低調であり、特に豊中町では実態の不明なものも多い。また、時期によって古墳の築造動向にも偏りがあり、特に前期・中期の古墳は少ない。

古墳時代前期の古墳は、現在のところ豊中町域では確認されていない。三豊平野全体を見渡すと、観音寺市の例であるが七宝山の南麓から派生する地点に、鹿隈鑵子塚古墳が所在する。また、矢の岡１号墳も前期から中期にかけての古墳とされる。

古墳時代中期になると、平野部に独立墳がいくつか確認される。笠田にある御本祖古墳は、かねてからその存在が知られており、大正時代に発掘調査が行われた前方後円墳である。その際に鉄剣、鉄刀、石棺などが出土したとあるが、詳細は不明である。

このほか、陣山より派生する独立丘陵上に、大塚古墳が存在する。大塚古墳は近年の発掘調査により、墳丘形態は周壕をもつ円墳であり、周濠を含めて径 37.5 ｍである。また葺石や埴輪列も確認されている（三豊市教育委員会 2014a）。

後期以降、古墳の築造は盛んになる。丘陵部に小規模な古墳群が点在するが、削平を受けているものが多く、実態が分かるものは少ない。石室の構造が明らかなものとしては、延命寺の境内に所在する延命１号墳が代表的なものとして挙げられる。

なお、古墳時代の集落の様相については不明な点も多いが、古墳時代の遺跡で、特筆すべきものの一つに、宮山窯跡があげられる。宮山窯跡は分布調査によって、窯体や灰原の存在が確認されおり、宮山の西斜面付近に窯の存在が確認できる（松本・岩橋 1984）。焼成されていた須恵器は、５世紀中ごろのもので、宮山窯跡は県内でも最古級の須恵器窯である。近年の調査で、窯体と排煙部、灰原の存在が確認されている（三豊市教育委員会 2011a・2012a）。

古代

この時期の遺跡としては、豊中町域では寺院の存在が特筆される。

豊中町域で確認できる寺院は道音寺・妙音寺の２か所である。これらが築かれるのはいずれも７世紀後半であり、県内で寺院が盛んに作られる時期である。

集落の様相は宮脇遺跡、延命遺跡などでわずかに確認することができる。

三豊市内では窯業生産の痕跡が多く認められるが、豊中町域では宮山において、７世紀代の窯跡である深山窯跡が存在する。

また、妙音寺境内には、建物に使用する瓦を焼成した瓦窯の存在が確認でき、境内内の金鳥池内で行

われた工事に伴う発掘調査により、現在まで２基の窯の存在が確認され、８世紀～９世紀の瓦が出土している（三豊市教育委員会 2013a）。

中世

中世の遺跡としては、丘陵部や平野部に山城が築城されるほか、平地・丘陵地帯いずれにおいても集落の存在が確認できる。

延命遺跡は、四国自動車横断道の建設に伴い発掘調査が行われ、八反地地区では 13 世紀を中心とした、溝によって区画された居住域と、区画外で集石墓が検出された（財団法人香川県埋蔵文化財センター 1990）。城岡地区においては中世後半までの遺構・遺物が検出されている。

中世の城跡については、いずれも発掘調査はなされていないが、現在の地形や地割の崩れなどから存在が想定される。岡本城跡のように現在も明確に構造の痕跡が見て取れるものや、友信土居のように、堀の痕跡が現在の地形から見て取れる居館の跡もある。ぎょくだい遺跡から西の山腹には、大村城跡が所在したとされる。

このほか、特に今回の調査地の周辺に絞ると、宮山には熊岡八幡神社や、室町時代の創建と考えられる惣官寺、それらからさらに谷筋を上った山地の中腹部分には、かつて本山寺の奥の院であった興隆寺跡と、岩盤をえぐりその下に安置された石塔群からなる県指定史跡の興隆寺石塔群がある。

近世

三豊郡においても、近世は新田の開発が盛んにおこなれた時期である。丘陵の谷筋を利用した谷池や平地の皿池の築造などにより、耕地面積を広げることが可能となった。現在の豊中町内のため池の大半は、近世の築造であるとされることからも、この時期に新田開発が進められたことがわかる。

また、近世後半に見られる商品作物の生産や、金肥の使用などといった農業技術の変化からも、農村での生産量の増加がみられ、村落内での生産力の違いによる格差が生じることとなった。

第２図　周辺の遺跡（三豊市都市計画図　豊中町を 12.5%縮小・加工し使用）

第１表　遺跡名称

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	ぎょくだい遺跡	古代・中世	15	小山城跡	中世	29	道音寺跡	古代
2	宮山窯跡	古墳時代中期	16	友信土居跡	中世	30	天神遺跡	弥生時代
3	深山窯跡	古代	17	帰来１号墳	古墳時代後期	31	竹田遺跡	中世
4	大村城跡（比地城）	中世？	18	帰来２号墳	古墳時代後期	32	大塚古墳	古墳時代中期
5	興隆寺跡（興隆寺石塔群）	中世	19	宮の尾遺跡	―	33	妙音寺跡（金鳥池窯跡）	古代
6	大谷遺跡	弥生時代	20	天神１号墳	古墳時代後期	34	チャンス塚古墳	古墳時代後期
7	小丸１号墳	古墳時代後期	21	天神２号墳	古墳時代後期	35	財田１号墳	古墳時代後期
8	小丸２号墳	古墳時代後期	22	天神３号墳	古墳時代後期	36	財田２号墳	古墳時代後期
9	上高野１号墳	古墳時代後期	23	大池遺跡	―	37	財田３号墳	古墳時代後期
10	上高野２号墳	古墳時代後期	24	天神窯跡１号	中世	38	宮脇遺跡	古代・中世
11	上高野３号墳	古墳時代後期	25	岡本城跡	中世	39	道下古墳	古墳時代後期
12	上高野４号墳	古墳時代後期	26	不動の滝遺跡	弥生時代、中世	番号	寺社名	年代
13	上高野５号墳	古墳時代後期	27	御本祖古墳	古墳時代	40	熊岡八幡神社	中世～
14	政本遺跡	弥生時代	28	道音寺窯跡	古代	41	惣官寺	中世～

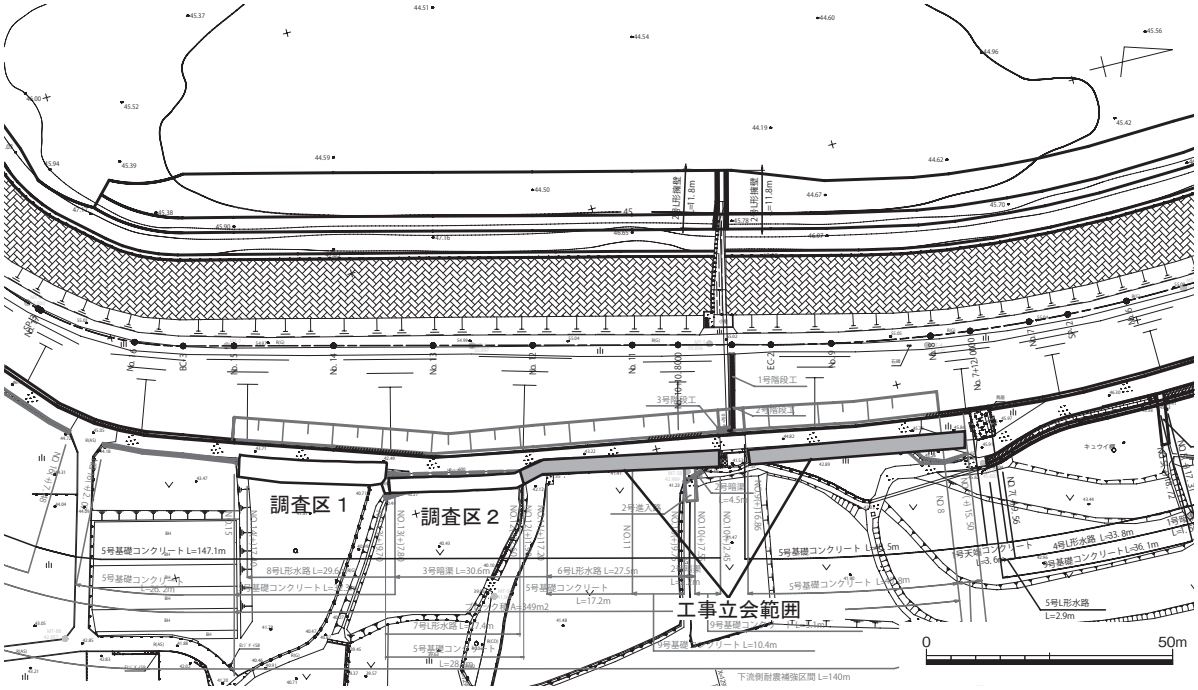
第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法

ぎょくだい遺跡では、ため池の堤体改修工事と並行して発掘調査を行ったことから、調査対象となった基盤改良工事を行う範囲をさらに分割して調査を行った。

調査区は、基盤改良時の地表面の高さ、つまりため池築造以前の地表面の高さから１、２区に分けて調査した。報告についても、これに従って行う。

なお、調査前の段階で、対象範囲には農道や水路などの構造物が存在していた。それらにかかわる造成土や盛土の撤去にいたるまでは重機を用いて解体・掘削を行い、遺構検出面以下は、人力により掘削を行った。



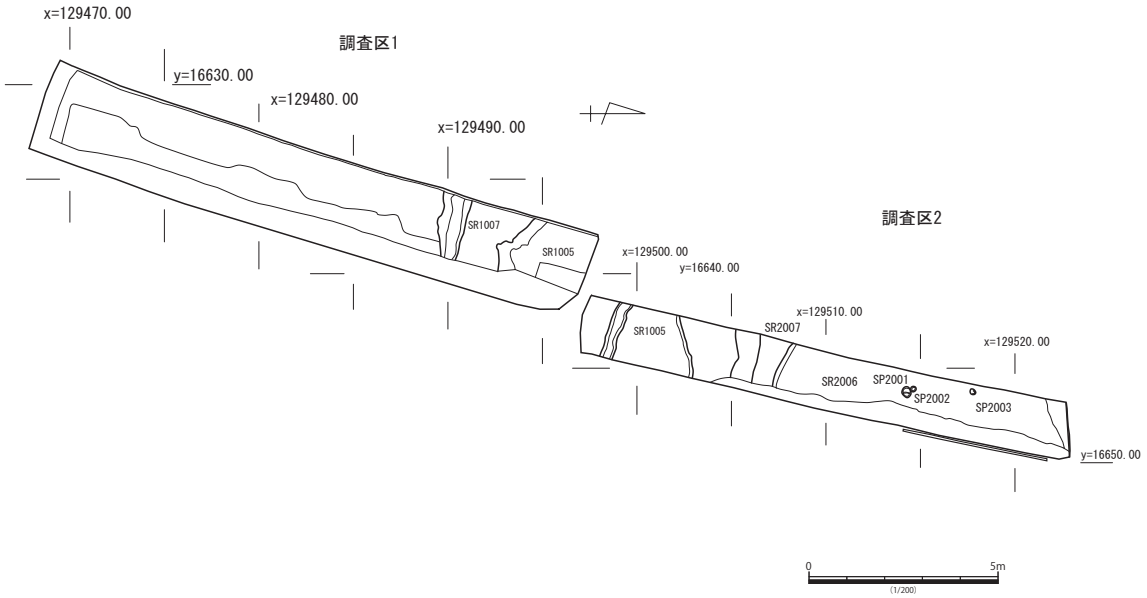
第３図　調査区位置図

第２節　層位

１、2 区ともに、堤体の崩落防止のため、現地表面から続く土層観察用の壁面を残すことが困難であった。調査範囲より３ｍほど西側の堤体の断面の観察を基に、基本的な層序について記述する（第５図、図版２）。

表土下には、宮池の堤体である盛土があり、複数の層に大別できる。詳細な記録は近年のもの以外不明であるが、宮池自体は幾度も改修がなされており、直近の改修工事は昭和 45 年である。堤体の上部に見られる細砂や塊石を含む粘質土で構成される①層は、その際の造成土と考えることができる。

また、①層の直下、礫を多量に含む層（②層）より下位には③層とした褐色のシルト層がみえる。た



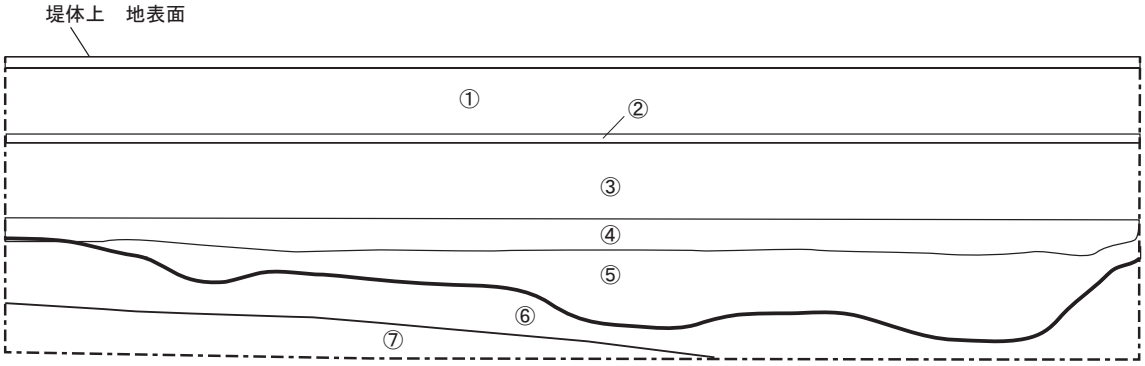
第４図　調査区全体平面図

め池築造以前の堆積状況とは異なり、層が厚く、周辺地形に関係なく水平に堆積している部分が多い。明らかに近代以降とされる要素は確認できないことからも、近世の宮池の堤体の一部ではないかと考えられる。

宮池の堤体より下位において、遺構・遺物が確認される。１区から２区にかけて、周辺地形にも現れるように、地形が急に落ち込んでいる部分があり、かつての谷筋の痕跡と考えられる。

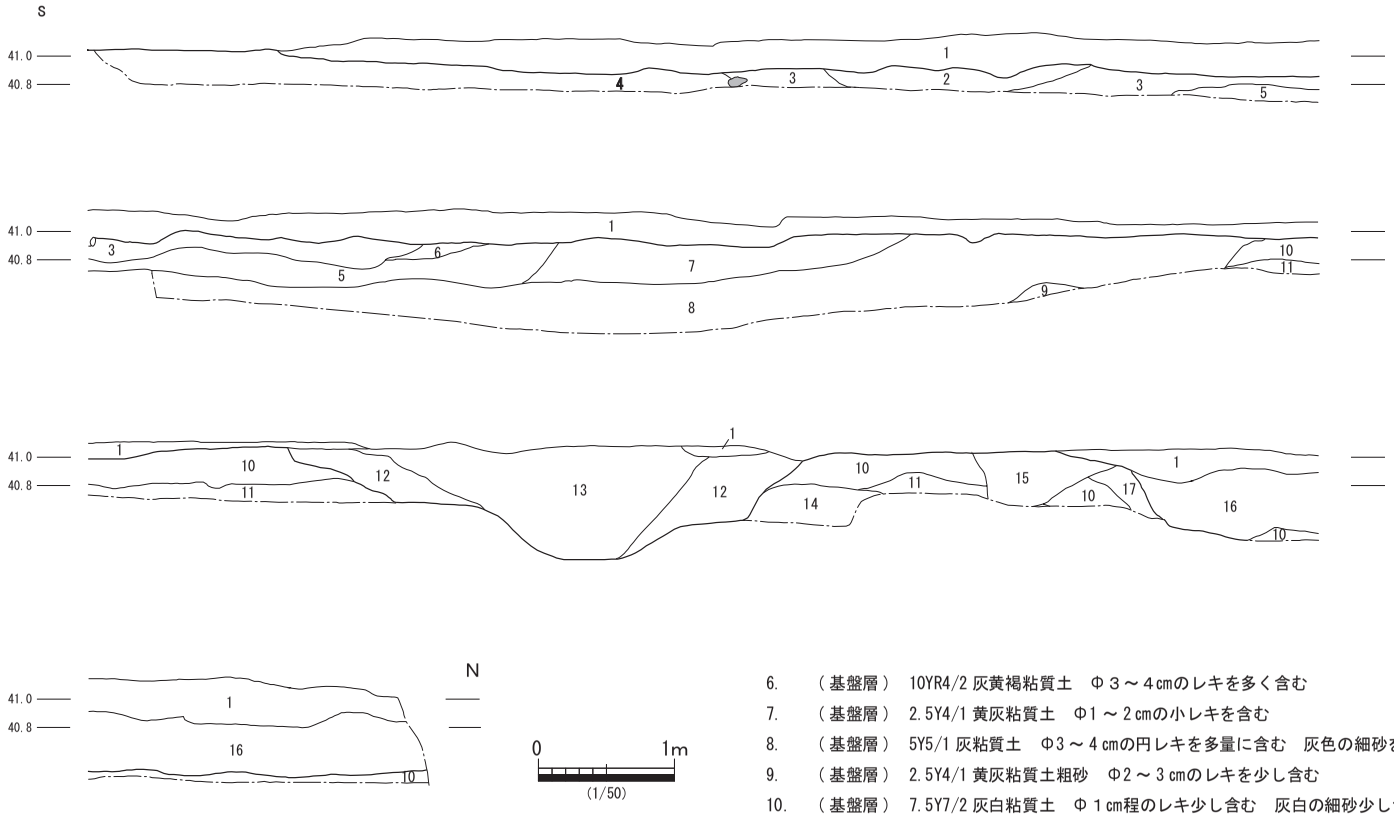
谷の埋土である⑤層より下位には、シルトに粗砂がまじる基盤層（⑥層）がみられ、さらに下層には、砂礫を中心とした層（⑦層）がみられる。

なお、調査区１においては（第６図）、主に遺構面以下（第５図⑤～⑦層）の、壁面の記録を作成することができた。遺構面とした粗砂混りのシルトより下位に礫層が認められるが、礫層からは遺構・遺物は確認されず、⑥層を遺構面とした。



① 昭和以降　宮池改修時堤体　（黄褐色粘質土　細砂や塊石を含む）
② 昭和以降　宮池改修時堤体か？（黄褐色粘質土　礫を多量に含む）
③ 近世　宮池堤体か　（褐色シルト）
④ 堤体の最下層ないしは谷埋没土（黒色粘質土　礫を多量に含む）
⑤ 中世　谷埋没土　（SR1005、SR2006 埋土）
⑥ 基盤層１　（粗砂混じりのシルト）
⑦ 基盤層２　（砂礫層）

第５図　堤体断面模式図



1. （水路にともなう撹乱） 10YR4/1 褐灰粘土に花崗土、灰白のシルトブロック含む
2. （基盤層） 2.5Y5/2 暗灰黄細砂　Φ3～8cm程のレキ（円レキ主体）を多く含む
3. （基盤層） 2.5Y5/2 暗灰黄極細砂　Φ2～5cmの円レキ少し含む　灰白のシルトブロック少し含む
4. （基盤層） 5Y5/2 灰オリーブ極細砂　灰白のシルト粒含む　しまりとても強
5. （基盤層） 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト　Φ5cm以上のレキ多く含む
6. （基盤層） 10YR4/2 灰黄褐粘質土　Φ３～４cmのレキを多く含む
7. （基盤層） 2.5Y4/1 黄灰粘質土　Φ1～2cmの小レキを含む
8. （基盤層） 5Y5/1 灰粘質土　Φ3～4cmの円レキを多量に含む　灰色の細砂を含む
9. （基盤層） 2.5Y4/1 黄灰粘質土粗砂　Φ2～3cmのレキを少し含む
10. （基盤層） 7.5Y7/2 灰白粘質土　Φ１cm程のレキ少し含む　灰白の細砂少し含む
11. （基盤層） 7.5GY7/1 明緑灰粘質土にΦ０．３cmの小レキ多く含む
黒色のシルトブロック少し含む
12. (SR1007)　2.5Y5/2 暗灰黄シルト黒色の粘質土ブロック少し含む　Φ5cm以上のレキ含む
13. (SR1007)　5Y5/1 灰粘質土　Φ5cm以上のレキを多量に含む
14. （基盤層） 10GY7/1 明緑灰極細砂褐色のシルトブロック　黒色の粘質土ブロック含む
15. （基盤層） 10YR5/1 褐灰シルト灰白のシルトブロック少し含む
16. (SR1005)　5Y4/1 灰粘質土　Φ2～3cm程の小レキ少し含む　Φ0.2cm程の粗砂を含む

第６図　調査区１西壁断面図（S=1/50）

第３節　調査区１の遺構・遺物

調査区１おいては、明確な遺構の存在は確認されなかった。調査対象範囲のほぼ全域にわたり、コンクリート製の水路の裏込め土がみられ、それらが遺構面を大きく削り込んでいたため、大部分の包含層や遺構については、削平を受けたと想定される。ただし、北端においては、七宝山から流下する谷筋の落ちが確認できた。SR1005 としたこの落ちの埋土からのみ、遺物が確認できる。

SR1005

確認できる範囲で埋土は１層である（第６図 16 層）。ただし、堤体の断面観察からも、さらに上部に堆積層が存在した可能性は高い。確認できる範囲で調査区１の中では幅 2.5 ｍほど、肩は不整形であり傾斜も緩やかである。埋土の観察から、谷に自然に堆積した土であると考えられる。

遺物は土師質土器・須恵器が出土しているが、詳細は調査区２の SR1005 と併せて報告する。

また、調査区１では、中央部分西壁沿いに、基盤層の堆積状況の確認のためのトレンチを掘削した（第６図）。その結果、谷の埋土を除いたのちに見える基盤層とした粗砂が混じるシルト層（第６図２～７層）より下位には礫を多く含む層が確認される。堆積年代については不明であるが、遺物などの出土は確認できない。

SR1007

埋土は２層に分けられる（第６図）。そのほかの遺構との切り合いも不明であり、遺物の出土も認められない。

第４節　調査区２の遺構・遺物

調査区１の北側に位置する調査区である。南側は調査区１と隣接しており、調査区１で検出された谷筋（SR1005）の中央部分がかかっている。SR1005 は、調査区２の中央付近において緩やかに北へあがってゆく。SR1005 を含む谷の最深部では、いくつかの落ち込みが確認できる。しかし、上面の削平が著しいことから、それぞれの埋没の先後関係は明確ではない。遺物の様相を比較しても、さほど堆積時期に差異はないと考えられるが、ひとまずそれぞれの落ち込みを、SR1005、SR2006、SR2007 として報告する。

また、調査区２では谷の埋没後の遺構も少量ではあるが見つかっている。

SP2001

調査区北半部で検出された。長径 0.3 ｍを測る。埋土は灰黄褐の粘質土に細粒砂が混じる。深度は 0.15 ｍである。遺物の出土はわずかで、なおかつ細片のため、年代を決定しうるものではないものの、谷の埋土を切るように掘りこまれていることから中世後半以降の年代が考えられる。また、隣接する宮池の築造年代が慶安３年（1650 年）と伝えられており（豊中町史編纂委員会 1979）、それに伴う堤体によっ

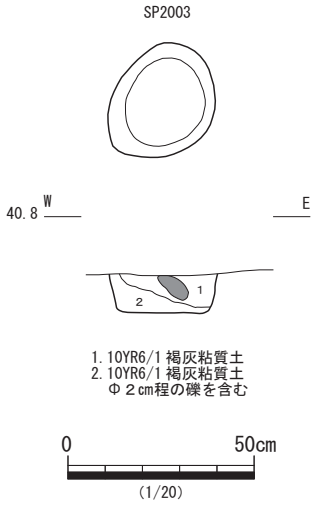
て埋没するこの遺構が、近世以降に下る可能性は少ないと考えられる。

SP2002

SP2001 に隣接して検出された。長径 0.15 mほどの小規模なピットである。埋土は､灰白の粘質土と白色のシルトからなる。遺物の出土は見られないが、埋土の特徴から SP2001 とほぼ同じ年代が想定される。

SP2003

調査区西壁に近い地点で検出された。長径 0.3 mを測り、逆台形気味の断面を持つ。埋土は２層に分層でき、上層には長径 0.1 mほどの礫を含む。遺物は出土していない。



第７図　SP2003　平・断面図

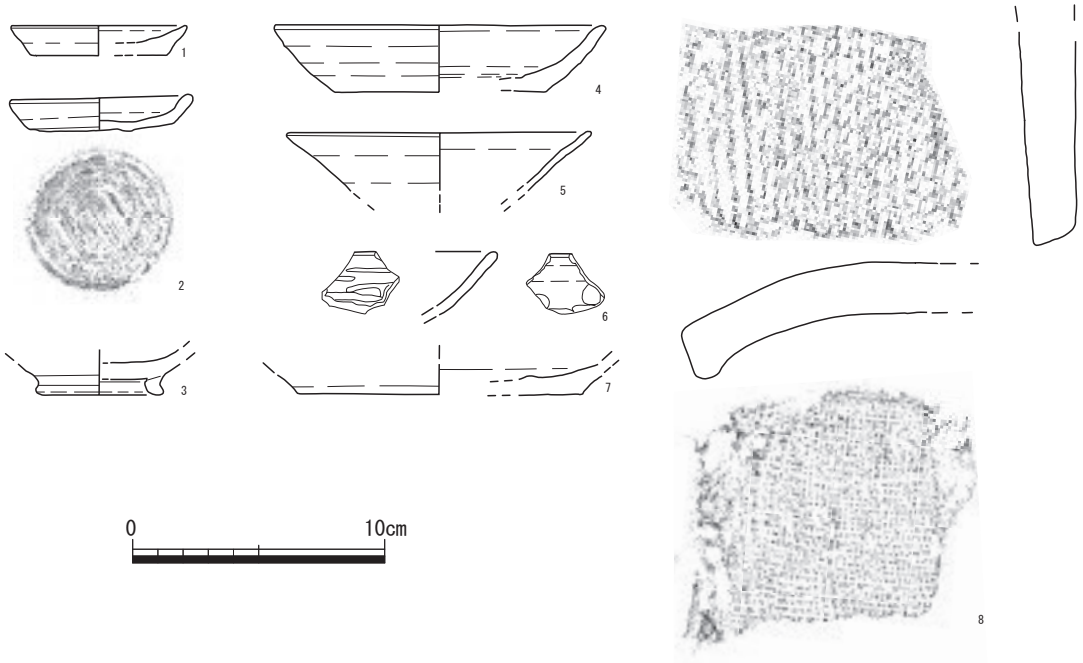
SR1005

調査区１と２にわたって検出された。埋土は、灰色の粘質土（第６図 16 層）からなる。北側の上がりについては削平により不明である。SR1005 の最深部分には、粗砂を中心とした層がみられ、比較的状態のよい遺物が出土している。

出土遺物は、土師質土器皿、杯、椀、瓦である。

1、２、７は土師質土器皿である。１は、口縁部径 7.0cm、やや外反気味に立ち上がり、先端は細くすぼまる。２はほぼ完形で出土した皿であり、緩やかに立ち上がる口縁部をもち、内面では底部と口縁部の境界が明瞭に仕上げられている。また口縁端部は丸くおさめる。１、２ともに底部はヘラ切りであり、ヘラ切りの痕跡が外面にまで及ぶ。

３は土師質土器椀である。灰白色を呈し、ヘラ切りの後に高台を貼り付けている。高台は、やや外方に踏ん張る形態をとる。



第８図　SR1005 出土遺物

４は土師質土器杯である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部はナデによってやや尖らせるような形状となる。

５は土師質土器椀である。全体に薄手で、胎土もそのほかの土師質の土器と異なり、灰白から褐色の色調を呈する。

６は須恵器椀である。外面下半にはユビオサエが認められる。内面には、横方向のミガキが認められるが、あまり密ではない。

８は平瓦である。凸面に縄目タタキ、凹面に布目が認められる。側面に関しては、面取り状に削られている部分が認められるが、一方で布目が側面にまで及ぶところもある。一枚作りで作られた瓦であり、調整の特徴からも、古代の瓦であると考えられる。

以上の出土遺物から、古代の遺物の混入も見られるが、遺物の大半は中世のものであり、特に土師質土器の法量が８㎝を下回り、やや小型化することや、その形態から考えると、SR1005 は 14 世紀前半ごろに埋没したと考えられる。

SR2006

調査区の北半部から中央部までを東西方向に横断する谷筋である。近代以降の造成や撹乱により、大部分の埋土は削平を受けていたため、埋没の最終段階の埋土の状況は不明である。残されていた埋土は、大別２層に分けて掘削を行った。

SR2006 上層（第９図４層）

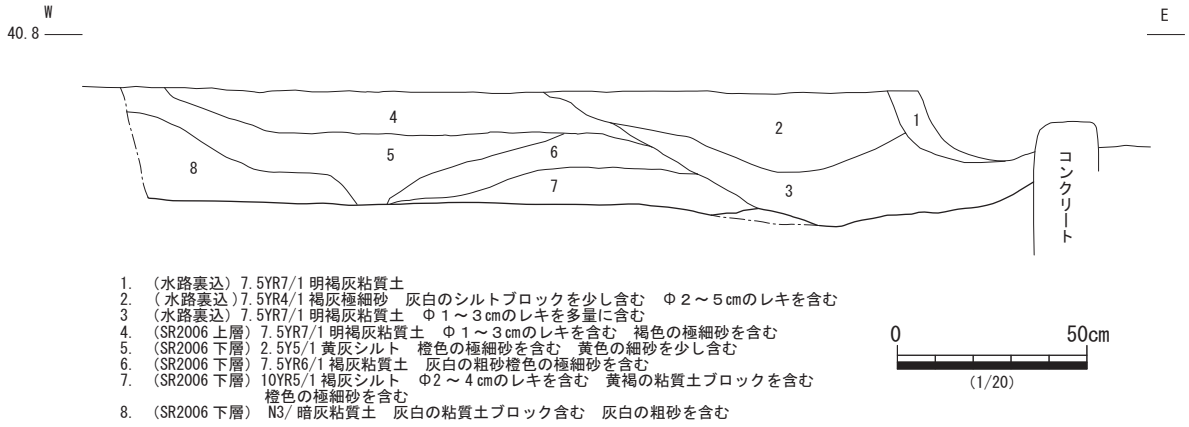
上層とした部分は、褐灰色の粘質土を中心とする。丘陵の下部に向かって斜堆積している。

出土遺物は、土師質土器椀・鍋・足釜、須恵器壺があげられる。

9 は土師質土器皿である。底部のみが残存しているが、まっすぐに外方へ伸びる口縁部を持つ。底部は、静止糸切りの痕跡が認められる。

10 は土師質土器椀である。底部のみが残存しており、断面逆台形の高台を貼り付けている。底面は中心を外に押し出すように整形されており、そののちにナデを施している。

11 は須恵器壺である。底部のみが残存している。胎土は灰白色を呈し、焼成は良好である。底部はヘラ切りののち、削り出しによって高台を作りだしている。外面もヘラ削りがなされ、内面についてはナデの痕跡が残る。底部外面に残る削りや胎土の特徴から、十瓶山窯跡群の製品と考えられる。外面には薄く自然釉が付着している。



第９図　SR2006　縦断面図

12 は土師質土器の鍋である。口縁部がやや内傾気味に立ち上がるタイプのもので、周辺の遺跡からも、口縁部が屈曲する土師質土器鍋と出土することがある。口縁端部付近は横方向のナデを施すが、それ以下ではユビオサエが目立つ。

13 は足釜である。脚部のみが残存している。全体を縦方向のナデによって成形したのちに、部分的にユビオサエを施す。

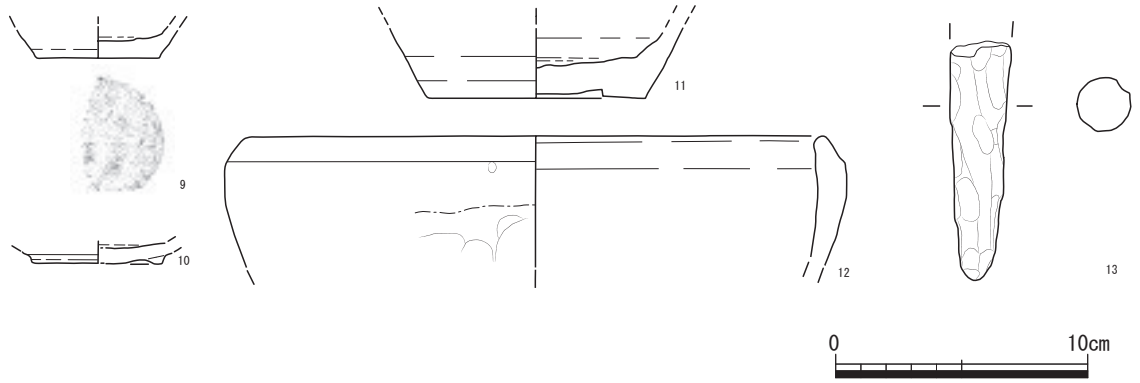
SR2006 下層（第９図５～８層）

下層は、褐色～暗灰色の粘質土に、粗砂、細粒砂を含む。下層は検出した SR2006 のほぼ全域にわたってみられる。

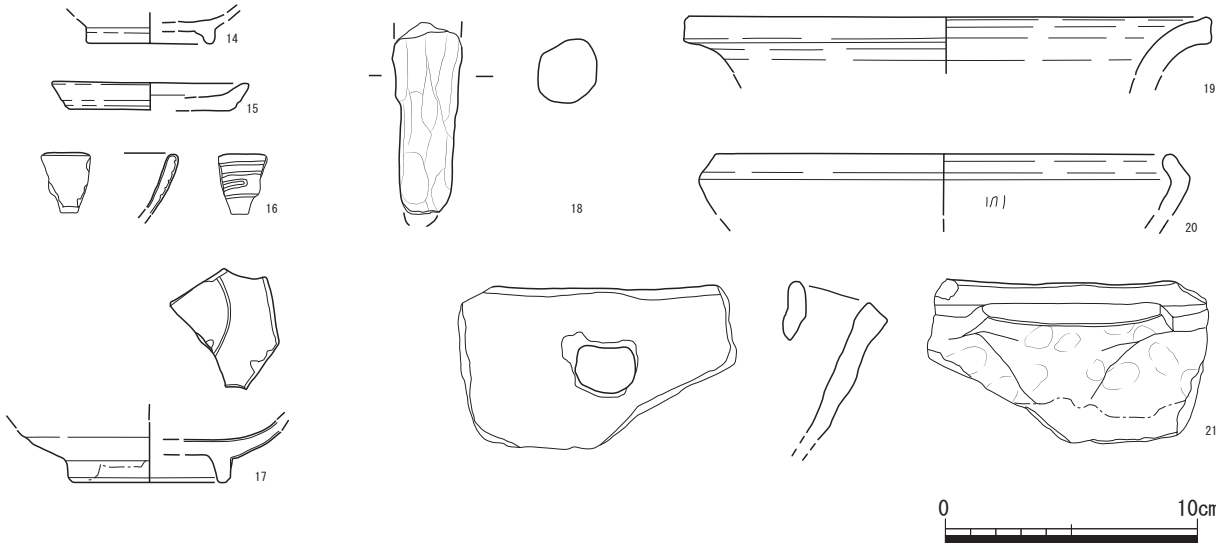
遺物については、土師質土器皿、椀、擂鉢、足釜、土鍋、青磁が出土した。

14 は土師質土器碗である。底部付近のみ残存し、胎土は灰白色を呈する。まっすぐに立ち上がる高台を持つ。貼り付けの痕跡は明瞭には確認できない。

15 は土師質土器皿である。先端に向かいややとがる口縁部が、ほぼまっすぐに外方へ広がっている。



第 10 図　SR2006 上層出土遺物



第 11 図　SR2006　下層出土遺物

底部はヘラ切りで、ヘラ切りの痕跡が外面にまで及んでいる。

16 は青磁碗である。口縁部が残存しており胎土は白みの強い灰白色で釉薬は淡い緑色を呈する。横方向に５条の文様を施したのちに施釉している。

17 は青磁碗である。高台以外には全面施釉し、暗い緑色を呈する、素地の胎土はやや赤みを帯びており、内面には圏線がめぐる。畳付付近の釉薬ははぎとられ、高台の断面は逆台形状を呈し直立する。

18 は足釜である、脚部の一部で、全体にユビオサエとナデの痕跡が残る。

19 は須恵器甕である。口縁端部のみが残存し、口縁部径は 20.4 ㎝である。全面にナデがみられ、端部は広い面をほぼ真横に向けるように作り出す。

20 は土師質土器擂鉢である、口縁部は明瞭な稜線を持つように屈曲させ、そのまま口縁端部を内方へ巻き込むようにして、口縁端部を丸く収める。調整は不明瞭であるが、内面に擂目が見て取れる。残存状況は悪く、３条確認できる。

21 は土師質土器鍋である。直立気味の口縁部を作り出したのちに外面に把手を取り付け穿孔する。全体形状を復元する情報は見られない。

以上の出土遺物から SR2006 下層の堆積年代は、青磁や土師器皿の形態からは 14 世紀代の年代が考えられるものの、21 の把手を持つ鍋といった煮炊具については、さらに年代が下る可能性がある。ただし、これまでの遺構の切りあいや、先述の宮池の築造時期との関係から、その埋没は近世まで下るような遺構ではないと判断できる。

第４章　総括

ぎょくだい遺跡の発掘調査では、主に中世の遺構･遺物が検出された、各時期の遺跡の様相を概観し、調査のまとめとする。

１、古代以前

古代以前には、七宝山に派生する丘陵の谷部分から流れる沢筋が、幾条も入っていたものと推定される。今回の調査では、部分的に下層の遺物の有無についても確認を行ったが、当該期の遺構・遺物は検出されていない。

２、古代

SR1005 の最下層である粗砂の中から、古代の平瓦が１点出土している。

瓦の詳細な年代については不明であるが、同一層より中世の遺物も出土していることから、純粋な古代の遺構とは認められない。

ただし、周辺に古代の瓦を伴う建物があった可能性は否定できず、遺跡が古代の寺院跡として考えられてきた由来にもなる地名との関連といったことは、今後の検討課題である。

３、中世

遺構・遺物ともに認められる時期である。

この時期には、現在の宮池周辺に数条あったと想定される谷筋の多くが埋没する。埋没していく中でいくらかの遺物の出土があったということは、周辺に居住域を中心としたエリアが推定され、おそらくはこれらの谷筋と谷筋の間に位置する微高地にあったものと考えられる。

地形復元などの成果により、中世におけるこの地域の集落の展開や生産域を明らかにしていくことが必要であろう。

４、近世以降

今回の調査では、近世以降の遺構・遺物については、現代のものを除き明確に確認することはできなかった。ため池の築造以後の様相については、他の資料も用いたうえで今後評価していきたい。

参考文献

松本敏三・岩橋孝 1984「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅰ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第１号
野中寛文 1987「奈良時代以降の遺構と遺物について」『四国横断道自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊大門遺跡　矢ノ岡遺跡　利生寺古墳　北条遺跡　道免窯跡』香川県教育委員会
金田章裕 1988「三豊平野の条里遺構」『香川県史１　原始・古代』
岡　俊二 1989「生産力の上昇と農民層」『香川県史４　近世Ⅱ』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1990『四国自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第八冊　延命遺跡』
片桐孝浩 1992「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大束川改修工事（津之郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター」
三豊市教育委員会 2011a『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書　第３集　- 平成 22 年度国庫補助事業報告書 -　石舟１号墳　石舟２号墳　宮山窯跡』
三豊市教育委員会 2012a『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書　第４集　- 平成 23 年度国庫補助事業報告書 -　吉吾古墳　西久保谷遺跡　宮山窯跡』
三豊市教育委員会 2013a『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書　第５集　- 平成 24 年度国庫補助事業報告書 -　紫雲出山遺跡　金鳥池窯跡』
三豊市教育委員会 2014『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書　第６集　農村地域防災減災事業（七宝地区・奥池）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　不動の滝遺跡奥池発掘調査報告書』
三豊市教育委員会 2015『三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書　第７集　- 平成 24 年度国庫補助事業報告書 -　大塚古墳　山王山古墳　紫雲出山遺跡』
三豊市教育委員会 2011b『古代の三豊 - 三豊市の歴史と文化 - 』
三豊市教育委員会 2012b『中世の三豊 - 三豊市の歴史と文化２ -』
三豊市教育委員会 2013b『近世の三豊 - 三豊市の歴史と文化３ -』
高瀬町教育委員会 2005『高瀬町史』通史編
豊中町誌編纂委員会 1979『豊中町誌』

第２表　遺物観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	色調(釉薬)	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
1	SR1005	土師質土器	皿	ナデ・底部ヘラ切り	ナデ	10YR8/1灰白	10YR8/2灰白			7.0	1.2	5.5
2	SR1005	土師質土器	皿	ナデ	ナデ・ユビオサエ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白			6.3	1.2	5.8
3	SR1005	土師質土器	椀	ナデ・底部ヘラ切り	ナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白			－	－	0.5
4	SR1005	土師質土器	杯	ナデ・底部ヘラ切り	ナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y8/2灰白			12.8	2.7	8.0
5	SR1005	土師質土器	杯？	ナデ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐			11.0	－	－
6	SR1005	須恵器	椀	ナデ・ユビオサエ	ナデ・ミガキ	5Y5/1灰	2.5Y5/1灰			－	－	－
7	SR1005	土師質土器	皿	ナデ・底部ヘラ切り	ナデ	2.5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	－	雲母	－	－	12.0
8	SR1005	瓦	平瓦	タタキ	布目	2.5Y6/1黄灰	2.5Y5/1黄灰			－	－	－
9	SR2006上層	土師質土器	皿	ナデ・底部静止糸切	ナデ	2.5Y8/1灰白	5Y8/1灰白			－	1.3	5.0
10	SR2006上層	土師質土器	椀	ナデ	ナデ	10YR8/1灰白	10YR8/1灰白			－	－	5.0
11	SR2006 上層	須恵器	壷	ヘラケズリ	ナデ	2.5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	5Y6/3オリーブ黄		－	－	9.7
12	SR2006 上層	土師質土器	足釜	ナデ・ユビオサエ	ナデ	10YR8/2灰白	2.5Y8/1灰白			23.0	－	－
13	SR2006 上層	土師質土器	足釜	ナデ・ユビオサエ	－	10YR7/3にぶい黄橙	－			－	－	－
14	SR2006 下層	土師質土器	椀	ナデ	ナデ	10YR8/1灰白	10YR8/2灰白			－	－	5.0
15	SR2006 下層	土師質土器	皿	ナデ・底部ヘラ切り	ナデ	5YR6/8橙	5YR6/8橙			8.0	1.1	6.2
16	SR2006下層	青磁	碗	－	－	10YR7/2灰白	7.5Y8/1灰白	緑色		－	－	－
17	SR2006下層	青磁	碗	ナデ・ケズリ	－	10Y5/2オリーブ灰	10Y6/1オリーブ灰			－	－	6.0
18	SR2006 下層	土師質土器	足釜	ナデ・ユビオサエ	－	10YR6/3にぶい黄橙	－			－	－	－
19	SR2006 下層	須恵器	甕	ナデ	ナデ	7.5YR8/1灰白	10YR7/1灰白			21.0	－	－
20	SR2006 下層	土師質土器	擂鉢	ナデ	ナデ	10YR8/2灰白	10YR8/2灰白			18.4	－	－
21	SR2006 下層	土師質土器	鍋	ユビオサエ	ナデ	10YR8/2灰白	10YR7/2にぶい黄橙			－	－	－

調査地遠景（七宝山から、写真中央が宮池）

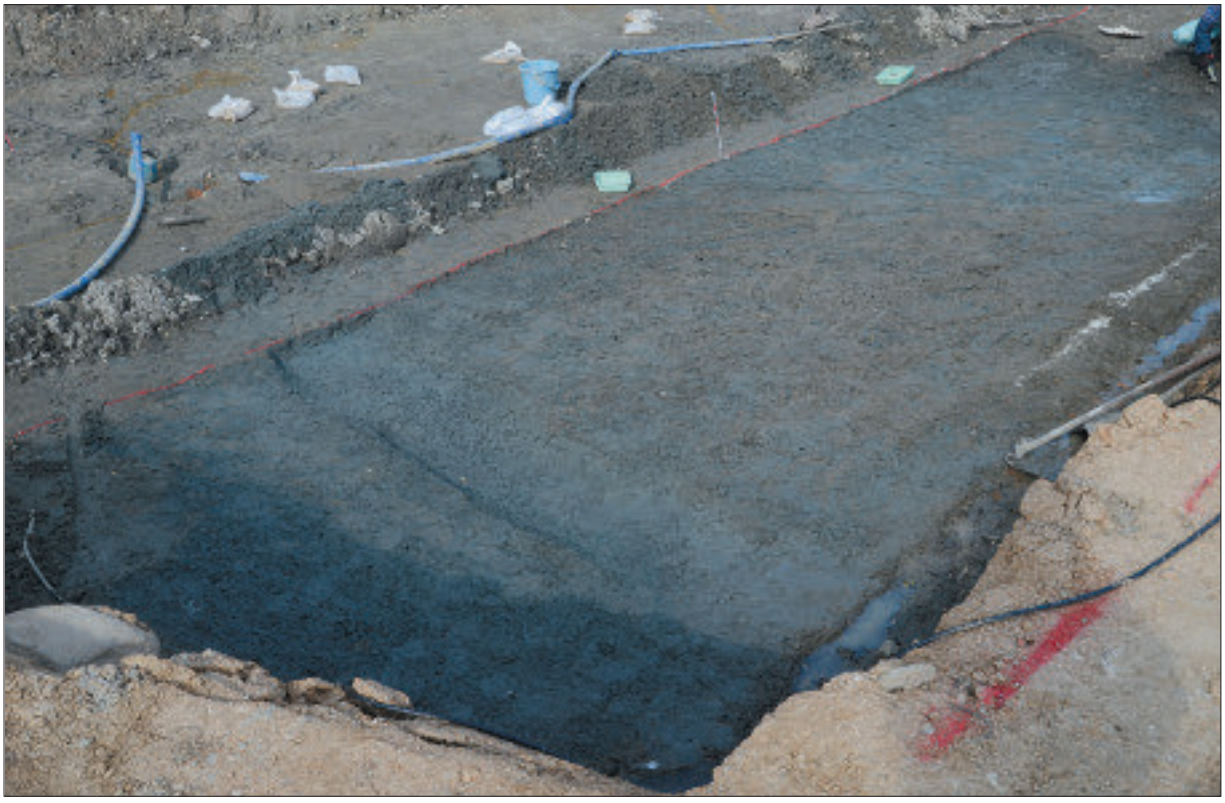
調査地遠景（宮池堤体上から）

図版２

調査区１　完掘状況（南東から）

調査区１　堤体断面

調査区２　SR1005　遺物出土状況



調査区２　SR1005　完掘状況

図版４

調査区２　遺構検出状況１

調査区２　遺構検出状況２

調査区２　SP2003 断面

調査区２　SR2006 断面

図版６

SR1005　出土遺物

SR2006　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ぎょくだいいせき
書名	ぎょくだい遺跡
シリーズ名	地震対策ため池防災工事（宮池）に伴う発掘調査報告
シリーズ番号	
編著者名	竹内　裕貴
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	香川県坂出市府中町南谷5001-4
発行年月日	平成29年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘原因
ぎょくだい 遺跡	香川県三豊市 豊中町比地大			34° 10′ 26″	140° 01′ 14″	2016/11/16 ～2016/12/2	地震対策ため 池防災工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ぎょくだい 遺跡	集落	鎌倉/ 室町	柱穴/ 流路	土師質土器・ 須恵器・青磁	鎌倉時代～室町時代（13世紀後半～16世紀）の流路と後出する遺構が検出された。

要約	ぎょくだい遺跡では、隣接する宮池の築造以前の周辺の地形や景観が一部明らかとなった。13世紀～16世紀に、七宝山から流れる谷筋が次第に埋没していく状況と、そののちに、谷筋と丘陵上の台地を利用してため池が築造されたことが明らかとなった。

地震対策ため池防災工事（宮池）改修に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

ぎょくだい遺跡

平成 29 年 3 月 17 日

編　　集　　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024
香川県坂出市府中町南谷 5001-4
Tel:0877-48-2191
発　　行　　香川県教育委員会
印　　刷　　株式会社　中央印刷所